

地域に根ざす人材育成モデルの構築と検証

—健康づくりリーダー養成講座「まめんなかえ師範塾」の 実践を通して—

中川 康江 (Yasue NAKAGAWA)

【研究の背景と目的】

本研究は、鳥取看護大学（以下「本学」）が企画・運営する、健康づくりリーダー及びボランティアを行う人材育成を目的とする講座「まめんなかえ師範塾」の実践を通して、育成された人材の継続的活動への援助策の検証と、地域に根ざす人材育成モデルの構築を目的とする。

本学では、平成 27 年度より、地域住民を対象とした地域の健康づくりリーダー人材養成講座「まめんなかえ師範塾」を企画・運営している。この「まめんなかえ師範塾」は、平成 27 年度 3 月修了の 1 期生 20 名を皮切りに、平成 28 年度末までに県内全域にわたる 5 期生合計 64 名を輩出している。平成 29 年度以降も県内全域（鳥取市・倉吉市・米子市）での実施を予定しており、年間 40～50 名程度の地域の健康づくりリーダー育成を目指している。

「まめんなかえ師範塾」修了生に対する具体的な活動支援策としては、第 1 段階として、講座の参加者一人ひとりの意識向上をはかること、第 2 段階として、本学が企画・運営する地域活動「まちの保健室」への継続的なボランティア参加を呼びかけ、募集することを行っている。なお、継続活動支援策の柱として「鳥取看護大学教育サポーター人材バンク」を立ち上げ、登録者に対する情報発信・情報共有を行っている。

このような取り組みの中、本研究では、1) 健康づくりリーダー養成講座の研修内容・効果の検証、2) 健康づくりリーダー養成講座修了生の活動状況の実態調査と検証を行うことにより、当該事業の成果と課題を明らかにし、地域に根ざす人材育成モデルの構築を検討していく。

○共同研究者

近田 敬子（鳥取看護大学 学長）

田中 響（鳥取看護大学看護学部看護学科 教授）

土居裕美子（鳥取看護大学看護学部看護学科 教授）

【研究の概要】

1) 調査対象：

平成 29 年 7 月までの「まめんなかえ師範塾」修了生のうち、同意の得られた 6 名を研究協力者とし、データ収集を行った。

2) 調査期間：平成 29 年 11 月 26 日～平成 30 年 1 月 30 日

3) 調査方法：インタビューガイドを用いた半構成的個人インタビューによる面接調査

4) 調査内容：

「まめんなかえ師範塾」の受講動機、修了後の感想、修了生の活動や関係性についての意見や感想、「まめんなかえ師範塾」の改善に必要なこと、大学に期待すること、自身にとって「まめんなかえ師範塾」とは何かを中心に、活動意欲となっているものを引き出すようにインタ

ビューを行った。

5) 分析方法

6名のインタビューの逐語録を作成した。今後、質的帰納的手法を取り、内容分析を行う予定である。本稿では、収集したデータを整理するにあたって、活動のやりがい、活動を活発化するための改善点や大学の支援に期待すること、の2点に焦点をあて、逐語録の中から重要と思われる内容を抽出し、ボランティア活動を継続させる要因を検討した。

6) 倫理的配慮：

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 2017-2）。

【結果】

1) 対象者の属性

	年齢	性別	修了期
Aさん	60歳代	女性	5期
Bさん	60歳代	男性	1期
Cさん	60歳代	女性	1期
Dさん	60歳代	女性	1期
Eさん	60歳代	女性	5期
Fさん	50歳代	女性	1期

2) インタビュー結果の整理

(1) 活動のやりがい

「まちの保健室」でのボランティア活動のやりがいとして、【他者との出会い・つながり】【自身の成長変化】【地域貢献・社会貢献】【他の場面での知識の活用】が抽出された。以下に発言内容例を記述する。

【他者との出会い・つながり】

「出会いかなあ。単純だけど、リピーターの人であったり、先生方、生徒さん、まめんなかえの人みんなで何かしようっていう、そういうものがある仲間ができたので」「こういう場があって、活動ができて、人とも知り合いができてっていうのは、すごい良いことだなあとします」「先生とお話ができたりとかね。それも私にとっては、すごく楽しい体験で」「やっぱり地域のね、一般の人との、学校の学生さんやら何やらが、一緒になって活動ができるのがすごくいいと思うんです」「私自身もそうです。学生さんの若いエネルギーを。違いますよ、やっぱりねえ」「学生さんと何か若い方との交流っていうのは、すごく元気になります」「普段仕事をしていると、ちょっとまた違う環境に身を置いて、また全然違うところで生活されている方とお話するのもすごく新鮮で」などの発言から、活動の中で地域の人々、教員や学生、仲間との出会いや交流が刺激となっているという内容が語られた。

【自身の成長変化】

「自分の中で、この『まめんなかえ師範塾』は、こう自分を成長させることにつながっていているので」「この歳になって出会って。またもう一つ何か違ったものが学べるでしょ」「自分の知識が、蓄えられていくというか、向上していくというか、新鮮ですよ」「(看護大教員の) お考えをお聞きしたりするのが、すごく勉強になります」「関わることで、何か自分の幅が広がるって」「いろんな方のお話を聞きながら、変化があるんですよ。自分の思考の中に」など、自分自身が活動の中で学べる、成長できる、幅が広がる、考え方が変化するという内容が語られた。

【地域貢献・社会貢献】

「何かの役に立っているということの喜びかもしれませんね」「自分が、まだ世の中の何かの役に

立てることがあるっていうことかな」「看護大学の『まちの保健室』の中の一員として、なにがしかの役に立てているっていうことはね、すごい生きがいだと思います」「ああ、やっていることが、これ地域に貢献できるかなあと思ったり」「ああ、やっぱり人助けっていうか、些細な力というか、微力だけど」「ちょっとしたそういうところで（参加者に）『ああ、よかった』って言って下さる人があるとね、うれしいですね」などの発言から、自身が地域・社会の役に立っていると感じる事が、活動のやりがいであり、生きがいになっているという内容が語られた。

【他の場面での知識の活用】

自身が勤務している会社での健康指導に「ちょっと『まちの保健室』で得られた情報もちらっと入れてみたり」、地域の健康づくり活動に以前から取組んできた立場から「災害があったときに役に立つんじゃないかなあ。被災されて避難所に集まった時だとかっていうところのケア的なところも、心の部分でというのは、大きな収穫かなあとは思ふなあ」と、「まちの保健室」の経験や知識を他の場面に主体的に活用することができるという内容が語られた。

(2) 活動を活発にするための改善点・大学の支援に期待すること

継続的に活動していくための改善点や、大学に支援してほしいことについて、**【継続的な研修制度】****【活動に参加しやすいしくみ・環境づくり】****【修了生間のコミュニケーションの活性化】**が抽出された。以下にその発言内容例を記述する。

【継続的な研修制度】

「師範塾の卒業証書をもらった時点で、次はいつですよ、勉強会次やりますよっていう。継続的に勉強していく形の方が、集まりやすいかなあって」「研修の形が、ほんの短時間でもあると良いなあと思います。年に1回か2回そういうのをさせていただけると」「（「まめんなかえ師範塾」が開講されるときに）この日とこの日にするので、良かったら一時間でも参加されませんか？みたいにしていただくと」「もっと勉強したいって思っています」「やはり勉強を継続していかないと」「師範塾で勉強したから、こういうことが言えるんだあとか、せつかく来られるので、何か一つでも良いこと言ってあげられたらなあって思います」など、継続的な研修制度を望む声が聞かれた。

【活動に参加しやすいしくみ・環境づくり】

具体的提案として[仲間や大学から強く働きかける][初回参加のハードルを下げる][参加して楽しいと思ってもらう]があった。「ちょっと出られませんか？とかアンケートでも取ってみるような形はどうだろうか」「もうちょっとやっぱり働きかけて、出やすい環境をつくってあげないと。しばらく出てないから出にくい、っていうのじゃね」「時々町であったりすると、声かけて『今度一緒に行きましょう』という風には言っているんですけど。でもやっぱり、手を引っ張って来ないとだめかな」「最初の一步が、一步があれば良いんでしょうけど」「師範塾の解散する時点で、次は何時何時っていうのがわかっていると、集まりやすいかなあ。間が開いてしまうと、もう何か離れてしまうので」「楽しいんですよっていう感じでね」「ボランティアって、無理したらダメなんですよ。だから、ちょっとまた楽しいなあって思われたら続けられて、してほしいと思って」などの内容が語られた。

【修了生間のコミュニケーションの活性化】

具体的提案として[「まめんなかえ師範塾」修了直後に先輩修了生と交流会を持つ][連絡網を作るなど連絡を取りやすいようにする]があった。「（講義を）受けたすぐ後に、こう何か親しくなれるようなね。向こうが5人ならこっちも5人とかぐらいで一緒にミーティング的なことをするとかな」「（同期生同士で）つながりを作って、またその人たち（新修了生）と電話も交換しといたら。連絡が取りやすいようにするとね」などの内容が語られた。

【考察と課題】

本稿では、「まめんなかえ師範塾」修了生のうち、継続して複数回「まちの保健室」のボランティアに参加している者に対して行ったインタビュー結果から、「活動のやりがい」「活動を活発にするための改善点・大学の支援に期待すること」の2点に焦点をあて、ボランティア活動を継続させる要因について考察した。

まず、修了生は、活動を通して、地域の人々、教員や学生、志を共にする仲間など【他者との出会い・つながり】の楽しさや新鮮さ、【自己の成長変化】を感じている。この【自身の成長変化】は、「まめんなかえ師範塾」の講義や「まちの保健室」への参加経験を通じて知識・技術が向上するという意識とともに、【他者との出会い・つながり】が刺激となって自己に対する振り返りがなされ、【自身の成長変化】を認識することでボランティア活動の「やりがい」を見だし、そこに「生きがい」を感じるという段階を経ていると考えられる。また、「まちの保健室」参加者の言葉や表情などから、自分が役に立っているという【地域貢献・社会貢献】の実感を得、さらには、「まちの保健室」で得た経験や知識を、自身の職場や地域といった他の場所で主体的に活用・応用できる点から「やりがい」を見出している場合があった。

また、ボランティア活動を継続的に活発化していくための改善点や大学に支援してほしいことについては、【継続的な研修制度】を望む声が多かった。1期生から7期生までの「まめんなかえ師範塾」修了直後の修了生アンケートの自由記載欄にも「もっと習熟したい」「取り組みを広げたい」「レベルアップ研修の希望」「知識・技術の向上」「今後も研修希望」という声があったことから、今後の養成講座において「知識・技術の習得感」と、終了後も継続した「学習意欲の刺激」を行うことの重要性が示唆され¹⁻⁴⁾、修了生の「知識・技術の向上」と「活動への継続意識の向上」を期待してすでにラダーシステムの研修が企画されている。今回の調査でも、修了直後からの継続的な研修制度が求められていることが明らかとなった。この【継続的な研修制度】の実現は、【活動に参加しやすいしくみ・環境づくり】にも、【修了生間のコミュニケーションの活性化】にも大きな役割を果たす。また、先述の【自身の成長変化】にも直接的な効果があり、ボランティア活動の継続意欲の向上に有効な方法であると考えられる。

現段階では、調査対象者が6名であり、質的にも十分な分析には至っていない。参加の動機や目的、活動頻度も、活動に対する思いも、ひとりひとり異なっている。今回は、全員のインタビューの逐語録から「活動のやりがい」「活動を活発化するための改善点や大学の支援に期待すること」の2点に焦点をあてて整理した段階である。今後さらに質的機能的分析を進め、重要アイテムの再検討、カテゴリー化を行い、修了生の主体的かつ持続的な活動が実現する要因を明らかにしていきたい。さらに、本年度末より、定期的なフォローアップ研修と、次年度より修了生の教育システムにラダー制度を取り入れることにしている。今後は、この新たな制度の成果もあわせて、分析を進めていく必要があると考える。

《参考文献》

- 1) 中川康江・田中響・土居裕美子・近田敬子 (2018)「地域の健康づくりリーダー養成による大学・地域連携強化の取り組み」『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』第76号、鳥取看護大学・鳥取短期大学、pp. 57-60、
- 2) 中川康江・田中響・土居裕美子・岡野祐一・高橋真由美 (2016)「地域の健康づくりリーダー『まめんなかえ師範塾』の育成事業の推進」鳥取看護大学『平成27年度「地域貢献委員会」報告書』pp. 13-14
- 3) 中川康江 (2017)「2年目を迎えた地域の健康づくりリーダー——『まめんなかえ師範塾』について——」鳥取看護大学『平成28年度「地域貢献活動」報告書』pp. 36-38
- 4) 中川康江・田中響・土居裕美子・近田敬子 (2018)「地域の健康づくりリーダー養成を通じた大学と地域の連携強化の取り組み——『まめんなかえ師範塾』を通して——」鳥取看護大学『平成29年度「地域貢献活動」報告書』pp. 59-63